

トランスジェンダー をいきる (8)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生(5)——父の涙に男の子泣きに泣く

1 初めに

Aが学校に来なくなったことで、私はある「事件」を起こすことになる。その「事件」が、思わぬ展開で、父の涙に繋がり、「男の子泣きに泣く」という体験をすることになる。

実は、この体験を団先生の授業（家族をテーマにした実習）でシェアした。した。その際、興味深い考察が得られたので、「自己物語の記述」と合わせて詳述する。

2 問題行動の概要と背景

前述したように、私にとってAが学校似来なくなったことは、（私を精神的に男の子にしてくれる女の子のような男の子はもういない）ということで、ショックとともに、これからどのようにして「男らしく覚悟していくか」という意味で、男性性構築のあり方を問われた重要なイベントであった。だが、実際には、小学校4年生から5年生にかけての私に、このような課題をこなすことは難しかった。

小学校3年生から、盲学校の寄宿舎に入射していた私は、Aが学校に来なくなってしばらくしたころ、何がきっかけであったかは忘れたが、多分間が指したのだろう、同室の1年下の女の子の鉛筆をほしがらうようになった。私も同室の彼女も点字を使用していたので、直接鉛筆を使うことはなかったし、私も両親から何本か鉛筆を買い与えてもらっていたのだが、彼女が持っている鉛筆の方が新しかったのか、毎日のように彼女の鉛筆ほしさに、「なあ、この鉛筆頂戴」と言っは、彼女の引き出しから鉛筆を取るようになった。その度に彼女は「はい」と言いながら、私の行動を黙認していた。

私にしてみれば、ちゃんと彼女に断りを入れた上で、鉛筆をもらった、という意識があ

ったので、別にそのことで誰からも何も言われないうろろという、安易な気持ちも手伝ってか、最初は1、2本だったのが、日を追うごとにエスカレートし、一気に10本以上取るようになった。しかし、そうはいつでも、自己の行動をまったく正当化していたわけではなかった。

3 問題行動に対する家族の対応

①兄の優しさがかすかな不安を呼ぶ

クリスマスのあくる日、二つ年上の兄が、私を外へ連れ出してくれた。そして、家の庭の土をスコップで穴を掘って、山を作り、夕方まで遊んでいた。

今から考えると、この日の兄は、なんだかやけに優しくかった。そのことが、私の心の中を、かすかに不安にさせた。(確かに同質の女の子に「この鉛筆頂戴」と言って取っていったんやけど、これって俺が彼女の鉛筆を盗んだことになるんやろうか。でも、彼女は俺が「頂戴」と言ったとき、1度も「いや」なんて言わなかった。でも、やっぱりこれは「おれが彼女の鉛筆を盗んだこと」になるんやろうか)

②父の涙に男の子泣きに泣く

その日の夜、仕事から帰宅した父に呼び出された。その父の厳然とした呼び出し方から、(もしかして、例の鉛筆のことかな?)と推測し、たちまちの内に真っ青な顔になり、おずおずと返事をした。

父の前で正座をしたとき、父は私に「筆箱を持ってくるように」と命じた。(ついにその話になるんだろうか。やっぱり「盗んだ」と思われて殴られるのかなあ)私はそれこそ「男らしく」覚悟して、彼女の鉛筆ではちきれそうな筆箱を持って父の前に座り直した。「その筆箱を開けてみる」言われるがままに筆箱を開けると、鉛筆がコタツのテーブルにばらばらとこぼれた。「これは誰の鉛筆や」そう言って父は1本の短い鉛筆を差し出した。「私の」と答えると、「じゃあ、これは」と言って、今度は丸くて長い鉛筆を差し出した。(これは、彼女に「頂戴」と言って取った鉛筆や)心の中ではそう言ったが言葉にならなかった。「だれのや」少々声を荒げた父を前に、私は凍りつきながら、それでも何とかうそをつく道を探そうとしていた。「誰かにもらったんか」「・・・」、「誰かにこうてもうたんか」「・・・」一行に答えないうちに、父はなおも畳み掛けるようにして言った。「お父さんやお母さんは、お前にこんな形の鉛筆をこうてやった覚えはないぞ。この鉛筆はどうしたんや」「これは・・・」と言いつけたとき、「取ったんか」と静かな声で問いかける父。(別に、「取った」という意識はないけど、やっぱり「取った」ことになるんやなあ。もう、ここまで着てしまった以上、本当のことを話すしかない)と思った私は、とりあえず、力なく小さくうなずいた。そして、殴られることを覚悟して、体をちぢめながらそのときを待った。すると父は静かな声で次のように聞いてきた。「誰の鉛筆取ったんや」「同じ部屋のひとつ下の

子」「その子は鉛筆をよく使うのか」「私と一緒に、点字を使うから、鉛筆はほとんど使っていない」「じゃあ、なんでその子の鉛筆を取ったんや、、、。しばらくの会話の後、またまた口を貝のように閉ざしてしまった私に、「確かにお前はお兄ちゃんと違って点字を使うから、鉛筆を持つことがほとんどないので、友達が持っている鉛筆がほしい気持ちはわかる。でも、そんなお前にも、少しだけ鉛筆をこうやってやってるやないか。お父さんは、お前をこんな風に、友達のものを取るような子供に育てた覚えはない、、、」そう言って父は静かに泣き出した。

私は子供心に、強烈なショックを受けた。「お前をそんな風に育てた覚えはない」という父のせりふではない。一家の大黒柱である父が、大の男が、子供の私の前で「泣いた」という事実。父の泣いている姿に、私も泣いた。しかも、「男の子泣き」に。このとき、私は思った。(俺のしたことで父を泣かせてしまったということは、それだけ俺は重大な悪いことをしてしまったことになる)

③そして「男らしく」誓う

年が明けて、3学の始業を前に、家族4人で集まって、もともと持っている私の鉛筆と、盗んだ彼女の鉛筆を仕分ける作業をした。父と兄はナイフで私の鉛筆にしるしを入れた。母は、盗んだ友達の鉛筆を輪ゴムで止めて私に明日、寄宿舎に言ったら、友達にすぐに返すように命じた。その際、両親から、長々と説教をされた記憶はない。

あくる日、寄宿舎に行った私は、真っ先に同質の彼女の引き出しに、輪ゴムで止めた鉛筆をそのまま入れた。そして、机の上に、「鉛筆を盗んでしまっでごめんなさい」とだけ書いた手紙を置いた。そして、次のように心に誓った。(そっか。どんなに彼女が「いや」って言わなくても、これはやっぱり「盗んだこと」になるんやな。もう、どんなにつらいことがあっても、絶対に人のものを盗むようなことはしない)と。

4 考察

団先生の授業の実習では、主に父との関係について聞かれたので、そのことを中心に考察する。

① 父が「選ばなかった手段」についての質問

実習の最初に聞かれたことは、「もし、お父さんに殴られていたら、どうなっていると思いますか?」という、父が「選ばなかった手段」についての質問であった。物心ついたときから、「俺は男だ」と思っていたので、「悪いことをしたら殴られること」を覚悟していた。とはいえ、実際に殴られたとしたら、その痛さより何より、(お前に、俺のつらさなんて分らんやろう、いや、わかってたまるか)というように、父に対する憎しみの感情を増幅させ、ひいては盗みがエスカレートしたり、最悪の場合には、万引きの常習犯

にもなりかねないことを想像する。

②父が「殴らなかった意味」についての質問

次に聞かれたことは、「お父さんは、あなたのつらさを誰よりもよく知っていたから、あなたを殴らなかったのではないのでしょうか？」という質問である。日ごろから、私と父との関係はあまりよくないので、最初はこの質問に対して否定的に受け止めていた。しかし、父の私への対応は、1対1で話し合ってくれたこと、家族全員の前で私をなじるようなことはしなかったこと、その上で、家族全員で問題を解決してくれたことなどを含めると、父は普段から口下手で、すぐに喧嘩ごしでものを言ったかとおもえば、つらいことを一切口にしない私の胸中を察していたのかもしれない。(A が学校に来なくなったことが、今の俺にとってつらいなんて、口が裂けても言えないし、言ってもしょうがない。それに、そんなこと父の前で言ったら、「やっぱり女の子や」なんて思われるのがいややから、絶対に言うてはならないし、言ってもたまるか。そんなことを言ったら男として恥ずかしいし、男が廢る)と強固なまでに口を閉ざしていたことが、父にとっては私以上につらかったのかもしれない。普段なら何かあるごとに、よく私を殴っていた父が、このときだけは「殴らない」という手段を選んだ意味を考えたとき、父との関係に対して、「あまりよくない」と言いながらも、実はこのような「危機を救ってくれたときもあった」という感謝の思いがわきあがってきた。その意味でこの団先生の授業実習は、私にとって、とくに父との関係性について再考するよい機会であった。

5 終わりに——辛い体験をシェアするという事

辛い体験を、ただ辛い思い出としてではなく、何かの機会にシェアすることで、新しい考察が生まれる。その考察を通して、辛い体験が、「そのときに体験しなければ意味をなさない重要なこと」として再び立ち現れてきたとき、それは単なる辛い思い出ではなく、私を納得させる重要な体験として、意義の深いものになるのである。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）